

彼方「かなた」

校長通信
H25.1.22
Vol.39

【学びの早道「読書」事業】



書好きな子どもを育成していこうとするものです。

本校がその実践協力校に指定され、昨日（二月二十一日）、一年四組管野学級の国語の時間に「ブックトーク」の授業が行われました。

毎朝取り組んでいる「写本」も百五十回を超える回数になりました。先生たちが紹介した本の一ページ（六百字）を書き写す時間ですが、これまでに様々なジャンルの本が紹介されています。時には新聞や雑誌記事、我孫子の先人（ふるさとカリキュラム用の副教材）、等からも抜粋し、紹介されることもありました。中学校という多



感な時期だからこそ読ませたい本や文章、言葉が沢山あるのです。

生徒が板書を写すのが速くなったり、先生方が写本のために本を探したり図書室へ足を運んだりという成果も出てきました。しかし一番の成果は、紹介された本を読んでみたいという生徒が少なからず出てきたことです。始業式の中で、学年代表で発表した山内さんからも「写本に集中して取り組み、紹介していただいた本を月に三冊ぐらいは読んでみたい。」という目標も語られました。とてもうれしい一言でした。他の生徒の写本の感想にも「写してみたらおもしろそうな本があった。」という声も聞かれました。

このような取り組みを踏まえた上で、一年生ではさらに国語の「近代文学への誘い」と題した読書単元の中で芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を学習しています。実際の授業では、芥川龍之介の「杜子春」「トロッコ」、夏目漱石の「坊っちゃん」、志賀直哉の「小僧の神様」、小泉八雲の「雪女」、宮沢賢治の「注文の多い料理店」等、「写本」の中でも紹介された本のブックトークを実施



しました。クイズ形式のブックトークや紙芝居朗読等、それぞれ工夫を凝らした発表が行われました。生徒の中からも「おもしろかったよ！」「読んでみようかな」等の声が聞かれました。

授業後、校長室で授業

の振り返りを行いました。講師の先生からは、「読む本を子どもたちに任せっきりになるのではなく、質のよい本を教えるすばらしい取り組み」「子どもたちの表情がとてもよい」「発表は原稿なしで！本当に読んでおもしろかったという思いから出てくる語りにしたい」「発表は慣れなので、場の設定を多く」「先生が発表のモデルになるのもいい方法」「どうなるか」と続きが読みたくなるのかを事前に十分考えさせたい」「年間計画の中に盛り込んでいきたいすばらしい授業」「教科担任の挑戦に感動」等多くのご指導をいただきました。



「写本」がただ視写するだけの取り組みではなく、読書への誘いや良書との出会いの機会となり、個人の取り組みが学校全体の特色となるよう、今後も積極的に取り組んでくれることを願ってやみません。

